

年 組 名前:

レアアース泥 経済性評価へ

南鳥島沖産採取終え帰港

「技術確立」試料分析

東京都心から1900キロ以上離れた南鳥島（東京都小笠原村）沖の深海底でレアアース（希土類）を含んだ泥の採取に成功した海洋研究開発機構の地球深部探査船「ちきゅう」が14日午後、静岡市の清水港に帰港した。今後、試料の分析を進め、2027年2月に予定する本格的な採掘試験の実施計画を固める。政府は経済性の評価を28年3月までに行う。

一連の事業を統括する石井正一・内閣府プログラムディレクターは清水港で取材に応じ「深海底のレアアース泥を取ってくる技術を確認した。本格試験へ準備を加速したい」と述べた。日本が輸入するレアアースの7割は中国由来。中国は資源輸出を外交カードとして使う姿勢を見せることもあり、

安定した供給先の確保が課題となつている。ただ、本州から遠く離れた深海底の資源がどこまで対中依存の低減に貢献するかは未知数だ。内閣府の事業では18年度から準備を開始。探査船は今年1月12日に清水港を出港した。30日には島から約150キロの海域で採取作業を始め、2月1日から複数地点で泥を引き揚げた。今回は金属の管をつないで採掘装置を海底まで下ろす手順を確認するのが主な目的。装置は水深約5600メートルで問題なく稼働したという。

27年の試掘では、1日当たり最大約350トンの採取が目標だ。南鳥島に運んで脱水な

ズーム
レアアース ハイテク機器や環境技術を支える17種類の元素の総称で、日本語で希土類と呼ばれる。電気自動車やスマートフォンなどに幅広く利用される。米地質調査所や国際エネルギー機関によると、2024年は世界の鉱石生産の7割、製錬の9割を中国が占めた。他の生産国はミャンマーや米国など少数で、消費国にとっては安定した供給の確保が課題。レアアースを使わない製品の開発や、調達先の多角化が進められている。

どの作業をし、本州で精製を試みる。並行して経済性の評価も行う。小野田紀美経済安全保障担当相は今月3日の記者会見で「結果を踏まえ、実用化の可能性を検討したい」とした。経済安全保障の観点から、ある程度の高コストは受け入れられるべきだとの考えも示した。高市早苗首相は8日のラジオ番組で、日米協力での開発を図りたいとの希望を語っている。

(2026年2月15日付 山梨日日新聞17面)

問1

レアアースは、どのような製品に使われている金属ですか。

.....

問2 今回の試験の目的と、その成果を教えてください。

・目的:

・成果:

問3 日本が、レアアースの採掘試験を行う理由を教えてください。

.....
.....